



ハイパードル高時代の出現

【2016年は「画期」の年】

本誌11月21日号でも述べたが、2016年は「画期（過去と新しい時代とを分けること。また、その区切り）」の年であった。恐らく、今年は10年後、20年後の方がその意味を重く受け止められるだろう。それは端的に言えば「スーパーパワーの崩壊」と「多極化する世界」を完全に描いて見せた、という事である。

【スーパーパワー崩壊】

19世紀末にドイツが統一され、米国、日本が勃興するまでは大英帝国の一極集中時代であった。大陸では多くの国家が群雄割拠しても海洋と世界では大英帝国が覇権を握っておりその優位性は揺らがなかった。その後、英国が米国に追い抜かれ、ドイツに鉄鋼生産で追い抜かれるようになると、多極化する世界に対応するように欧州で最も脅威となったドイツを包囲した（英仏協商、英露協商）。その後ドイツは没落したものの、ヒトラー率いる第三帝国で復活。ただ、これもドイツ包囲網でつぶした……。と、ここまでは良かったが、英国が完全に疲弊化。第二次大戦後はソ連、米国というスーパーパワーが覇権を競う時代となった。

だが、ソ連は1990年に崩壊、米国が唯一のスーパーパワーとなる。しかし、2017年に自らその地位から下がるだろう。トランプが掲げる「米国第一」という言葉は、米国の富を守るためならば世界から手を引いても良いという事に他ならないからだ。

【多極化する世界】

そもそも米国がスーパーパワーとして君臨していた時代にも、BRICSなどは台頭していたし、実際中国やロシアなどは新しいスーパーパワーとしてその地位を渴望しているといえる。また、米国包囲網からなんとか自立したいとも思っている。

そんな中、米国がモンロー主義に回帰してくれば、これほど防衛上うれしいことは無い。ロシアにとって悲願である旧共産圏への影響力回復や、中国の野望である（また中国にとっては清帝国の影響力を回復するに過ぎない）東アジアへの圧倒的影響力と支配力を獲得することも長期的には不可能ではない。

そして、多くのNATOや東アジア・東南アジアの国々にとって不幸かもしれないが、シェールオイルなどでエネルギーが自給出来てしまえば、米国にとってのシーレーン、東アジア、中近東の価値は大いに減殺されてしまう。

つまり、米国はEUにも東アジアにも核心的利益は存在せず、第二次大戦前と違い、これといった領土もない（グアム程度）。

実際、トランプ政権では太平洋の主要な基地をハワイまで退けるという事も検討されているようだ。

となると、アジア情勢や欧州情勢に関しては、米国が孤立主義的・不介入主義であった戦前、それも第一次大戦前の状況に極めて近づくといえるのではないかと。

【ハイパードル高時代が出現する四つの理由】

ドルは買われすぎであり、下落する、との市場参加者の声は多い。だが、冷静にトランプ政権の施策を考えると、それとは真逆の答えが導かれる。

それは「ハイパードル高」ということだ。理由を上げよう。

第一に、トランプ政権が共和党政権であるという事。共和党政権は、共和党の大統領とは親和的である。オバマ政権が常に議会で多数派となっていた共和党と先鋭的に対立し、多くの法案を修正あるいは諦めてしまうほかなかった事と状況は一変する。ある意味、トランプの施策は伝統的な共和党の施策に近く、議会の説得は遥かにたやすい。その意味ではレーガノミクス以来の強力な法案を通す力のある政権になりうる。世界の懸念をよそに、日本の安倍政権並み、あるいはそれ以上の安定政権になり得るという事を忘れてはならない。

第二に、トランプ政権の国内施策は財政刺激のかつマーケットにフレンドリーである。米国の経済成長を4%まで引き上げ、巨額の財政を打つ。法人税減税を実施し、金融への過剰な規制は見直す、というのだ。これは予想されたクリントン政権やオバマ政権の現状の施策に比べ、大いに解放的かつ企業収益にプラスだ。これをもって株を買う、という反応は実に正しい。先にも述べたようにオバマ政権と違い、これらの施策は実行される可能性は高に高い。

第三に、トランプ政権の施策は長期金利を上昇させる。財政赤字と景気刺激策によるインフレ期待で長期債は売られ、金利は上昇する。財政赤字の一部は防衛費の減額で相殺される可能性もあるが、それでも潜在成長率引き上げによる期待インフレの方が上回るだろう。クリントン政権期の量的緩和は二度と起きようがない。つまり、ドルは先進国で唯一量的緩和をやめ、米国債市場は正常なイールドカーブに戻る事になる。これは、全主要通貨に対するドル高が構造的に続くという事を意味する。

第四に多極化する世界においては、絶対安全なのは「米国のみ」となるという事だ。米国がトランプの主張する通り、NATOからも日本からも駐留費やコストを支払わせるのであれば、それは「円売り／ユーロ売り／ドル買い」になる。もっと押し進んで、NATOや日本が自己防衛して米国がこうした地域から徐々に手を引けば、これらの地域は地政学的にも不安定となり、円やユーロは地政学的リスクプレミアムが乗ってくるだろう。これは通貨の価値を減殺する。

以上、四つの新しい事態の出現により、トランプ政権は史上かつてないほどのハイパードル高を招く可能性がある。そして、そのハイパードル高をブロック経済（というか米国一国主義）で乗り切る事は — 米国にとっては — 可能である。取引を最小限に抑えれば、ドルの価値はますます騰がろう。既に邦銀や欧州銀行は決済通貨としてのドル不足に悩んでいる。これが恒常的になり、誰もがドルを渴望する第二次大戦直後のような世界、あるいは、ニクソンショック前、米国が泥沼のベトナム戦争に突入する前のような世界に — 21世紀は再びなるのかもしれないのだ。

ザ・テクニカル

順調に推移も今週警戒

日経平均株価は12月1日にギャップアップし18,746の高値を付けた。翌2日（金曜日）は18,435とギャップダウンし孤立した高値、即ち弱気アイランドリバーサルが出現。目先の高値を暗示している。先週は、暴走列車も短期では行き過ぎの領域に入っていると述べたが、過去2週間のコメントが興味深い。即ち「2014年10月末日銀の異次元緩和第二段の時の例を挙げたが、…日経平均は直前の安値14,529（14年10月17日）から11営業日で2,600円近く上昇した（11月4日17,127）。今回の上昇幅とスピードも当時に匹敵するものがある。仮に今回も2,600円幅を上げるとすれば、18,700円レベルとなる。当時はその後、4営業日の僅かな調整を入れて再び反騰、1か月後に18,000円に達した。安値（当時の1年サイクルボトム）から8週間でほぼ3,500円幅を上げたことになる。このロケットスタートが今回の起点（11月9日）から始まっているとすれば、その8週間後、即ち来年1月第1週には19,600円程度にはなっているだろう。また当時（14年末）の上昇率（24%）で見れば、今回、約2万円となる」。12月1日の高値は見事こ

今週の押し

ユーロは戻り売り一貫

11月米雇用統計は、失業率こそ4.9%から4.6%に改善されたが、NFPは市場予想前月比18万人増に対し17.8万人増で、10月分は16.1万人増から14.2万人増に下方修正。ホリデーシーズン真っ只中でも取引を余儀なくされる市場関係者の背中を押す程の材料にはならず、来週のFOMC待ちの状態だ。

当欄ではユーロドル相場の戻り売りを推奨。その姿勢に変化はない。即ち「…昨年3月からの相場は38週、29週で安値が出現している事を鑑みて、節目となる安値は本年末から来年始めに出現すると見る。…相場は少なくとも1.045、もしくはパリティ（1:1）になると予測。買い参入はそこまで待ちたい。なお、売りの損切りはリスク許容度に応じて1.0950か1.115以上の引け値に置きたい」。その上で先週は11月24日の年初来安値1.0518からこう予測「…感謝祭からクリスマスまでは、成績の良かった市場関係者から休むので商いが閑散になりやすい。その場合、少なくとも23日移動平均（先週末で1.0833）

の水準をヒットした。よって今週は急落に警戒する。

先週はまた、「中期的なトレンドは上昇局面にあるものの、短期では数日の調整を想定する。上記の4営業日程度」と述べたがこれは未だ到来していない。今週調整に入ればこれが実現されるだろう。その後は再び上昇基調を辿ると見る。少なくとも8週以上の上昇を見込んでいることから、「年末年始2万円」は妥当なレベル。上値目標値はこれまで述べてきた通り変更はない「目先は20週サイクルの上昇期は10週以上続くと想定される（強気型サイクル）。そのターゲットは18,720±308、さらに、20,332±498。このシナリオは（11月）9日の安値が更新されるまで有効」。次の第2ターゲットを視野に今後予定される押し目ではまた買いを仕込んでいくのが良いだろう。

ただ、この押し目が17,700を割って引けてくるとかなりの深押しを警戒する必要がある。

注意事項としては先週述べた通り「11月15～16日にかけて空けたギャップ17,727～17,764は重要なサポートになる。これは本年1月末、日銀の緩和発表後の続伸、翌週月曜日に付けた動き17,666からその日の高値17,905をカバーしている」。

このレベルをギャップダウンすれば短期では売りに転換する。付近まで戻る可能性はある。短期売買に徹するなら目先の突っ込み場面は買ってもよいだろう。日足では15日スローストキャスティクスと強気ダイバージェンスの関係。チャネルラインの第一下限がサポートとなり、先週末の引け値で第二下限も突破。恐らく今週23日移動平均までの戻りがあるだろう。

このラインは10月24日号から使っている。ただ11月の高安値を黄金分割すると3月と6月の安値が別の意味を持ち出す。

11月9日（1.1299）から24日（1.0518）までの下げ幅の①38%訂正水準は1.0816±0.0035、②50%訂正水準は1.0909±0.0046、そして③62%訂正水準は1.1001±0.0057となる。つまり、①は3月安値ラインの水準、②は6月安値ラインの水準、そして③は69日移動平均水準に相当するのだ。

冒頭で触れた日柄は、6月安値から今週が24週目。11月安値（22週目）が日柄不足で下がるなら、戻りは通常①程度。FOMCで過度に上げて②。先週短期買いを仕掛けていれば、今週から来週にかけ①～②付近での利食いドテンが望ましい。

水星逆行開始日（12月19日）1週間前から相場は荒れやすい。そこがFOMC（12月13～14日）という点に注意したい。

今週の主な予定・経済統計

12月5日（月）

- ・黒田日銀総裁が講演
- ・11月の米ISM非製造業景況指数（55.5の予想、前回は54.5）
- ・ユーロ圏財務相会合
- ・地方連銀総裁が各地で講演

12月6日（火）

- ・10月の米製造業新規受注、及び耐久財受注
- ・EU財務相理事会

12月7日（水）…上弦

- ・岩田日銀副総裁が講演
- ・10月の米卸売在庫（前月は0.5%増）

12月8日（木）

- ・米週間原油在庫（11月26日～12月2日分）
- ・米週間新規失業保険申請件数（前週は25.5万件）
- ・ECB政策金利発表（ドラギECB総裁の記者会見あり）

12月9日（金）

- ・12月の米ミシガン大学消費者信頼感指数・速報値（94.4の予想、前月は93.8）



今週の相場風林語録

三割高下は一応向かえ（1）

江戸時代の米相場から出た言葉である。当時のお米の生産、流通、消費、人口など考えて、作柄の豊凶作以外に大きな変化という要因がなかった。

今週の九星★波動

“薄い” 乱高下を予想

南雲 紫蘭

急騰が止まらない円安相場も、11月25～28日にかけやっと調整といえるような値動きになりました。

もっとも、NYの週末は実質休日（正確には半ドンと休日の組み合わせ）であったので、ポジション調整の域は出ない、との観測もあります。今年は歴史的にも珍しい政治によって相場が大きく左右された一年となりましたが、12月はそれも一服し、ファンダメンタルズに今一度注目が集まりそうです。

米雇用統計にみる米国の雇用堅調の再確認、中国の景気回復の信頼度、OPECの減産の本気度などが今一度注目されるでしょう。

そして、忘れてはならないのが、ここからクリスマスに向けてどんどん市場参加者が減っていく、ということ。そのため、12月の雇用統計以降からは薄い中を乱高下する相場が示現しそうです。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (373)

中原 駿

サラリーマンは、悲しいものである。

上野の東京帰省は、あくまでもホーム・リーグ。つまり休暇であった。

しかし、海外赴任者の休暇はその名前通り完全な休暇ではなかった。休暇の最初か、その最後には本社に寄り「本部メンバーのご機嫌伺い」という名のミーティングがセットされるのが通例であった。

つまり、ホーム・リーグとは現地で働くマネージャーとしての健康状態や管理状態がチェックされる機会となっていた、と言っていい。実際、上野も本部のある丸の内と国際部門のある青山の二か所に顔を出すことになっていた。

第六感の乱高下期突入



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

2～3%の上下動

ドル円相場は乱高下期に突入。5年サイクルが上昇期に入っているなら、この高下も中段の調整に過ぎない。1年後、後から見て「安い値位置」であったと判る。

昨年の高値から今年の安値までの61.8%戻しが115.57。今年の到達点としては良いレベルで115～116円レベルは昨年の重要なサポートであった。今度は上値抵抗になるだろう。

波動は日足ベースで高値と安値が切り上がる小刻みな上下運動。ややウエッジ系ともいえる。

11月25日高値113.89、28日下落して111.36、その後上伸して12月1日114.82。次の下げで111.36を維持して高値を更新すれば、ウエッジ形になろう。12月中下旬まで2～3%の小刻みな上下動が繰り返される恐れがある。この上下動が前述した高値安値切り上がり型であれば、そのウエッジ終了後はもう一段、上伸する場面が到来すると思う。

この形態は前の安値が更新されると調整が深くなる。現段階では11月28日の111.36が安値がサポート。維持されて反騰し高値を更新すれば115.00±0.22までは許容範囲。高値が12月1日につけている可能性もあるが、雇用統計後の動きにかかる。それでも小刻みな動き故、上伸はあっても2～5日以内、下げも同様。

さて、先々週から述べている注意事項、即ち「前5年サイクルの上昇期でもこの深押しは頻繁に出現した。2012年9月

九星波動の月盤は7日から《一白水星》に入ります。いわゆる「陰極」ですが、月盤は基本逆転していますから、天井波乱となる可能性が高いと想定します。

12月中旬に向け、波乱の中急騰する相場を想定しますが、クリスマス前後からは手出し無用の薄い乱高下となることが想像されます。ご注意あれ。

11月21日	11月22日	11月23日	11月24日	11月25日	11月28日	11月29日	11月30日	12月1日	12月2日
月(八白土星)	火(七赤金星)	水(六白金星)	木(五黄土星)	金(四緑木星)	月(一白水星)	火(九紫火星)	水(八白土星)	木(七赤金星)	金(六白金星)
後場急変	存外上昇	前後相反	天底	後上がる	陰極	急騰	後場急変	存外上がる	前後相反
12月5日	12月6日	12月7日	12月8日	12月9日					
月(三碧木星)	火(二黒土星)	水(一白水星)	木(一白水星)	金(二黒土星)					
虚勢	軟調	急落	急騰	弱保合					

国際部門にいるものの通例として、まず国際部門に顔をだし、その後本部の人事部などに顔を出すという順番まで決まっていた。

そこで、上野は国際部門のある青山に向かったのだが、すぐ顔を出す気分になれなかったのだ。

国際部門長と市場管理室には午後一番で顔を出す手筈となっていた。無理をすれば、成田に8時にはつくので午前中のアポイントも不可能ではなかったが、とてもその気分にはなれなかったからだ。

昨晚から何も食べていないのに、まったく食欲が無い上野は、晩秋の銀杏並木に佇み、ひたすら銀杏の枯葉を踏みにじっていたのである。

積み重なる枯葉は、ダメになった部下のポジションのようであり、その上をダメ押しのように動くのは、無駄になるとわかっていて上野のあがきのようなであった。

末から上昇に転じた相場は自民党に政権を変えてからは今回と同様、ドル円の急騰劇が始まった。特に12月以降、82円台の相場が翌年2月95円近くまで上伸、そして2月25日には94.72から90.89まで4円近く、4%を半日で下げた。その後乱高下しながらも上昇を継続、13年5月103.73をつけるに至った。しかしその後17営業日下げて93円台。一気に10円幅、下げ率は9.6%。

4%以上の下げが高値から発生すると厳しくなるが、現段階では11月28日安値111.36を下回った場合に限り警戒すべきである。それまでは高値、安値切り上がり型を想定し、ウエッジ終了後、年末年始に向けてもう一段の上伸局面で61.8%戻し以上を狙いたい。4%以上の調整はそれからだろう。なお、2014年以降、毎年1月は新年から下げ基調で始まっている。今年は1月末に日銀のサプライズ緩和で月末大きく上げたが、1月4日から20日まで5円近く下げた。週明け115円以上は一部利食いしておきたい。111円30までは押し目買い。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第18回】NY金のサイクルについて(1)

先週末で『フォーキャスト 2017』の相場分析パートの翻訳が終了しました。これから校正やゲラチェック、更に年末にラジオ日経で放送されるメリマン氏のインタビュー原稿の翻訳が続きますが、今月は長期相場サイクルの日柄が2016年版から変更になった銘柄を解説したいと思います。既に、MMAサイクルズレポートをお読みの方はご存知かと思いますが、日柄が変わった銘柄とはNY金の事です。通貨としての金の歴史は古いのですが、現在のNY金相場の歴史はNYダウなどと比べると意外と新しく、1970年代ニクソンショック以降になります。

筆者の手元で確認できる史上最安値は1976年8月25日の100ドル。メリマン氏は同年9月の99ドルとしていますが、これは現物市場で見ると、先物市場で見ると、先物だとして、どの限月で見るとによって異なるためです。これまでメリマン氏はここを起点に25年サイクルが存在すると仮定していました。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

日経平均株価のアストロジカルマップ

OPEC総会の結果を受けてドル高、株価となり、日経平均株価は12月1日に新高値を更新。他の市場も、概ねこの日が先週の高安値のピーク。2日の米雇用統計の結果がまだ模様（ブルームバーグ）であった事がその要因とされる。

星回りの視点ではやはり11月25日木星・天王星スクエア(90度)ならびに金星・冥王星を加えたT字スクエアの影響かと思う。2週間前の当欄では11月26日午前0時のホロスコープを掲載、「オーブ(±3営業日)を考慮すると、この天体位相の影響は今月末30日まで続く可能性がある」と記述。日経平均の高値はその翌日につけた事から、何らかの関連性はあると考える。

『フォーキャスト 2017』の相場パートを訳し終えて判った事だが昨年末から今年9月まで3回形成された土星・海王星スクエアと同じように、上記の木星・冥王星スクエアと今月末の木星・

期近を用いるのか、当時の中心限月(6月限)を用いるのかによって価格は異なりますが、NY金相場の次の節目となったのが1999年8月25日。1976年の安値から23年後です。

ここまで4銘柄の相場サイクルを解説してきましたが、どの相場にも18年前後のサイクルが存在します。さらにこのサイクルは短縮や延長もあるので、金の23年は延長サイクルかもしれない。ただ、内部のサブサイクル等の計測から、今回の『フォーキャスト 2017』ではNY金の長期相場サイクルを25年から23.5年サイクルに短縮して分析しています。ただ短縮されたからといって、1999年8月25日の起点は変わりません。

この連載やメリマン氏の著書である『相場サイクルの基本』をお読みの方はご存知の通り、相場サイクルは全て、2~3つのサブサイクルで構成されているので、12月中はNY金の23.5年サイクルを細かくサブサイクルごとに検証します。

このNY金の超長期サイクルは25年(300カ月)なら8.33年(100カ月)という具合に3分割されていると見られています。従って23.5年(282カ月)なら7.83年(94カ月)。次回からは、この7.83年サイクルに注目してみたいと思います。

天王星オポジション(180度)の組み合わせによるT字スクエアの存在は、2017年に重要視される天体位相になっている。

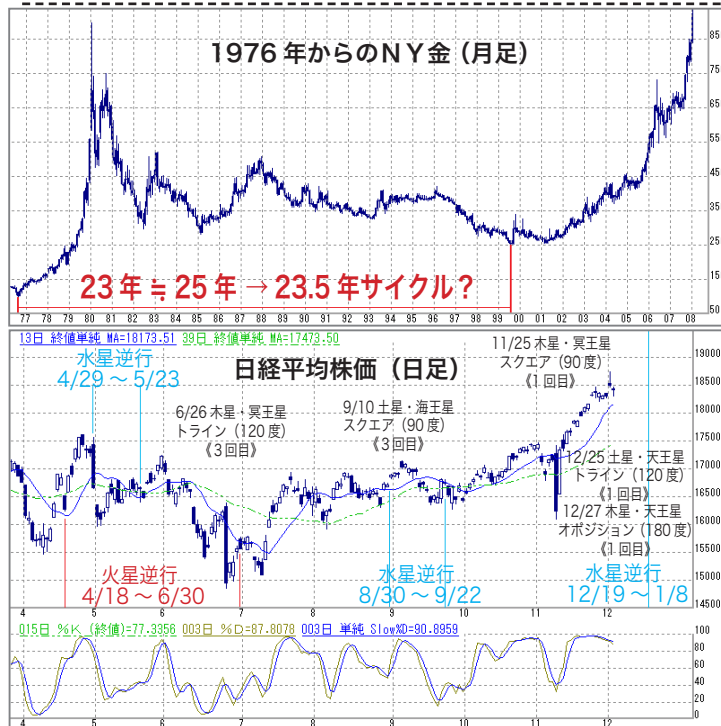
そこで今回は日経平均の日足に逆行と主要天体位相の時間帯を付記してみた。スペースの都合で5月26日の木星・土星スクエアと6月18日の土星・海王星スクエアは載せていない。

すると、やはり2週間前のこの記述が重要になる。即ち“…12月26日前後が怪しい。12月27日(米国時間12月26日)3時半ごろ、木星と天王星はオポジション(180度)の関係になる。その2日前の25日に土星と天王星、金星と木星はそれぞれトライン(120度)の関係に。トラインは惑星間が良好な関係である事を示すソフトアスペクトと呼ばれる天体位相。良好転じて上昇のピーク、即ち天井と関連性が高い。これは株式や米ドルにはポジティブ、金やユーロドルにはネガティブに働くものとする。更にこの時間帯は12月19日~2017年1月8日まで発生する水星逆行の中間点(12月28~29日)。筆者はこのエリアで大きな相場の節目が出現するものと予測する”。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み!!

今週のアストロロジー info

- 12月05日(月) 月の波紋、小競り合いは見ておくれ
- 12月06日(火) 明日の戦いに備える
- 12月07日(水) 長い一日になりそう。結果、元の木阿弥
- 12月08日(木) 変化日、特に商品(前後3営業日)
- 12月09日(金) 転換の余韻残す
- 12月10日(土) 人気の集まるところ、此れ天なり、神なり
- 12月11日(日) 相場失敗の一番の原因は強欲なり



12月26日発売予定

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日輝香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問い合わせ: 投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込み先: 投資日報出版(株) 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町 3-12-11 GRANDE 人形町 6F 電話: 03-3669-0278 FAX: 03-3668-4444